

大東亜戦争（日支戦争・対英米戦争の8年戦争）の真実

（第2回）近衛文麿共産主義政権の誕生とコミンテルン32年テーゼによる日

本亡国の始まり---1937年6月

【本編論考に関する注意書き】

□ 内：中川八洋 筑波大学名誉教授の著作からそのまま引用した部分。著作名、引用頁等は最下部に明示。

ただし、抜粋部冒頭の表題は、ブログ構成の都合上、私〔=ブログ作成者〕が付させて頂いた。

□ 内：中川八洋 筑波大学名誉教授の著作の要旨を変えずに、私〔=ブログ作成者〕が短く簡明に再構成したか、他の資料によって著作内容の補足をした部分。

□ 内の、() 書き・色文字：私〔=ブログ作成者〕の補足、
〔 〕 書き・傍点・アンダーラインその他すべて：著者 中川八洋による。

〔1〕 1937年6月、近衛文麿共産主義政権の誕生とコミンテルン（ソ連共産党国際部）32年テーゼによる日本亡国の始まり

〔1〕-1 師弟関係の共産主義者、近衛文麿と河上肇

もともと近衛文麿は東京大学〔哲学科〕をわざわざ中退し、京都帝大〔法科〕へ入りなおしているが、その理由は近衛自身が述懐しているように、『貧乏物語』の著者として著名なあの当代随一の共産主義者 河上肇〔京大助教授、共産黨員、懲役 5 年の実刑〕のもとで学びたかったからであった。それほどまでに近衛は共産主義に傾倒していた。

この河上肇と近衛文麿の師弟関係の一コマを、近衛自身は次のように述べている。

(近衛文麿)

「当時の河上氏は已にマルクスの研究をしてみ、我々にマルクスが読めるようにならなければだめだと終始云っていた。・・・氏の宅を訪問すると、書齋に通され、火鉢を囲み刻煙草を吹かしながらもの静かな気持ちでいつまでも話相手になってくれた。

この頃私は河上氏から二冊の本をもらつた。

一つはスバルゴの『カール・マルクスの生涯』であり、一つはイタリアのトリノ大学のロリア教授の『コンテンポラリー・ソシャル・プロブレムズ』であつた。

後者については・・・私も亦昂奮して、一気呵成にそれを読み了つた事を今も記憶してゐる」〔『清談録』、千倉書房〕

近衛は、約一年間にわたるこの河上肇との師弟交流によって**社会主義思想**のエッセンスを学び、共鳴するようになった。在学中であったが近衛は、共産主義者のオスカー・ワイルドの『社会主義の下の人間の魂』を翻訳し、「社会主義論」の表題で二回に分けて第三次『**新思潮**』の1914年5月号と6月号に発表した。

この論文のなかで近衛は、ワイルドの言葉を借りながら、「**私有財産制が諸悪の根源**であって、財産と貧困の害悪を断ち切るには**社会主義を実現**するしかない」と主張している。**近衛**は立派な**共産主義者**だった。

〔1〕-2 近衛文麿内閣と「コミンテルン 32 年テーゼ」

近衛が、**ソ連共産党国際部（コミンテルン）**が**日本共産党**に命じていた「**コミンテルンの 1932 年テーゼ**〔日本の共産主義者への命令〕」に従って行動を興したことは、次のように、明白である。なお、「コミンテルン 32 年テーゼ」は、**近衛の恩師**で、逃亡中の**河上肇**の**訳**であった。

（**コミンテルン 32 年テーゼの抜粋**）

「日本の共産主義者の行動スローガンは、〈**中国の完全な独立のための闘争**〔= 支那全土を**中国共産党の支配下**にする〕〉でなくてはならない」

「日本の共産主義者は、**敗戦主義者**〔= **日本を敗北に持ち込むこと**〕であるにとどまらないで、さらに**ソ連の勝利**〔= 対日戦争でのソ連の勝利〕と**中国人**

民の解放〔＝中国共産党の支那全土の支配〕とのために積極的に戦わなければならない」

国民党軍に対して近衛がなぜ戦争を開始したかは、弱小の軍隊にすぎない毛沢東の共産党に代理して、毛沢東のために、その代理として、中国共産党が単独でも対国民党戦争に勝利し全支那征服ができるまで、蒋介石の国民党軍をつぶしてあげることだった。

当然に蒋介石との講和はあり得ず、その通りに、「^{しょうかいせき}蒋介石を^{あいて}相手にせず」(1938年1月16日)の声明を出した。

汪兆銘という傀儡政権まで作った。支那全土を毛沢東の手に渡すまで、日中戦争を続けるのが近衛の堅い信条で意志であった。

■ 近衛文麿は小さな盧溝橋事件を支那事変、日支戦争へと拡大し、それを長期化（泥沼化）させるための工作を次々に行った。

- ① 現地の松井・秦停戦協定（1937年7月11日）の電報を無視して「北支派兵声明」を閣議決定。
- ② 「北支事変」を「支那事変」へと公式名称を変更（臨時軍事費特別会計の設置、1937年9月2日）。
- ③ 和平交渉の打ち切りを決定（1938年1月14日、3日前の1月11日の御前会議決定「日中和平」を覆す）。

④ 「蒋介石を^{あいて}対手とせず」の内閣声明(1938年1月16日)

中川八洋曰く、

「交渉している相手国政府、交戦している相手国政府を突然〈相手と認めない〉とすれば、いかなる外交といえども交渉そのものが成り立たない。

誰にもわかる常識以前のイロハである。また、そのようなことは当時の国際社会においてもルールに反し文明の国際社会の一員としてあるまじき〈野蛮〉な対外行動であった。

政友会の長老小川平吉は近衛文麿に〈蒋介石ヲ 相手トセル 戦争ナレバ、蒋介石ヲ 相手トシテ 講和ヲ為スハ 当然ナリ〉〔『小川平吉関係文書』〕と戒めているが、その通りである。しかし、日本は1938年1月16日、そのような外交交渉のイロハに反する、まさしく信じられない〔unthinkable〕行為を世界の注目する中でやってしまった。」（出典：中川八洋『近衛文麿とルーズベルト---大東亜戦争の真実』、PHP 研究所、101~102頁）

そしてこれらが、1938年11月3日の近衛声明---「東亜新秩序」という支那からの英米追放の煽動スローガン---に繋がっていくのである。

(コミンテルン 32年テーゼの抜粋)

「天皇制は、国内の政治的反動と封建制のあらゆる遺物との支柱である。・・・革命の来たるべき段階の**主要な諸任務**は、次のとおりである。

(1) 天皇制の**打倒**」

〔1〕-3 近衛文麿内閣の側近・ブレーンのマルキスト（共産主義者）

・・・1937年6月に、45歳の**近衛**が**総理大臣**になってその直後に、なんと**治安維持法**や刑事犯罪で服役中の**共産黨員**や2・26事件の**革新将校**〔**共産主義**かぶれの**青年士官**〕の関係者を**大赦**しようと奔走して、元老、重臣、その他の政府関係者はびっくりしたが、このように**近衛**は、**社会主義**〔**共産主義**〕**運動**であれば、**殺人**すら**違法性**はなく、「**正義**」であるとする**純粋な共産主義者の考**えを維持していた。

青年期の思想が熟年になって変えることは稀で、通常はおこりえないし、近衛は自殺の直前まで日本随一の**コミュニスト**であり続けた。

だから、近衛文麿は総理大臣の女房役である書記官長〔現在の官房長官〕に**風見章**という**親ソ一辺倒**で過激な**共産主義者**を選んでいる。

風見章は**戦後すぐ**、**社会党系左派**に属しスターリンの創った**ソ連 NKGB**のフロント組織「**世界平和評議会**」（=戦後の反核兵器・反原発運動・その他の自由主義政府打倒運動による、西側陣営謀略の前衛組織）の評議委員となったり、親ソ団体「**日ソ協会**」の副会長としてソ連へ滅私奉公にこれつとめた、**超過激**で**熱烈な共産主義者**であった。近衛は風見のこの**共産イデオロギー**に**共鳴**したが故に、最側近に起用したのである。

図-2 近衛文麿とその側近・ブレインのマルキスト〔共産主義者〕たち

近衛文麿	
(内閣の朝食会)	(昭和研究会の有力メンバー)
風見章	後藤隆之助 稲葉秀三〔●〕
佐々弘雄	暉峻義等 勝間田清一〔●〕
笠 信太郎	東畑精一 正木千冬〔●〕
蠟山政道	三木清 和田耕作〔●〕
尾崎秀実〔*〕	矢部貞治 ほか
牛場友彦	
西園寺公一〔*〕	
犬養 健〔*〕	
松本重治〔*〕	
ほか	

〔*〕ゾルゲ事件で逮捕
〔●〕企画院事件で逮捕

つまり、日本には 1937 年 6 月、**近衛内閣**という、正真正銘の**共産主義政**
権が誕生したのである。そして、**支那〔中国〕**を**共産化**するための**日中戦争**を
ただちに開始した。

近衛のブレイン・トラスト「**昭和研究会**」の一人であった**三木清**も、**暴力革**
命論の〔**共産党系**の〕**共産主義者**であった。

この「昭和研究会」には**平貞蔵**〔法政大学教授〕などの**労農派系**の過激な**社**
会主義者もいた。

日本の**計画経済化**の理論的な教科書となった『日本経済の再編成』を出版し
た**笠信太郎**もいた。

ソ連の「**積極工作者〔スパイ]**」で、処刑された**尾崎秀実**らもこのメンバーで

あった。

近衛の「昭和研究会」とは、共産主義者やソ連を「祖国」と考える知識人たちが一大参集していたのである。

近衛文麿の長男の文隆〔陸軍中尉〕がシベリア抑留中に KGB〔1954 年に NKGB が改組〕の拷問によって、鳩山一郎による日ソ共同宣言調印の 10 日後、モスクワで死亡した〔1956 年 10 月 29 日〕。

ソ連を「理想国家」と心酔していた父親としての近衛文麿が、もし自殺せずに生きていたら、この悲報をどう聞いただろう。

ソ連に憧れた日本共産党・杉本良吉の恋人で、1938 年 1 月にソ連と一緒に亡命した岡田嘉子〔女優〕が、この杉本が拷問のうえ銃殺されたときと同じ心境なのだろうか（= 共産主義のような闘争と裏切りと殺戮しか持ち合わせず、自由と美德と人間尊重の精神を持ち合わせない狂った無神論宗教など、信仰するに値しないと、なぜわからないのだろうか？）。

〔1〕-4 日支戦争・対英米戦争を不可避にした歴史事象（事件）のほとんどすべてが、近衛内閣の任期中に生じているという「不動の事実」を見よ！

日中戦争をなぜ日本はしたのか、日独伊三国同盟をなぜ日本は締結したのか、〔南進〕と対英米戦争の道をなぜ日本は選択したのか・・・などは（戦犯容疑者として巣鴨拘置所に出頭する最終期日 1945 年 12 月 16 日未明に自殺した）

近衛文麿の墓に道連れにされた。

日本の破局を運命づけたこれらすべての決定がなされたときの総理大臣はすべて近衛文麿であって、これらの国家の意思を決定した最高権力者は憲法上も実態においても近衛文麿だけしかしないからである〔表1〕参照のこと。

東条英機は、近衛が敷いたレールの上を走った、近衛の影武者にすぎなかった。

表1 対英米戦争とその大敗北を計画した近衛文麿

	事項	年 日	首相	備考
〔日支戦争開戦と推進〕				
(1)	北支4ヶ師団派兵	1937年7月	近衛文麿	日支戦争の開始
(2)	「蒋介石を対手とせず」	1938年1月	近衛文麿	日支戦争の長期化
(3)	「東亜新秩序」声明	1938年11月	近衛文麿	中共成立まで日支戦争の永久化
〔対英米戦争の準備と開始〕				
(4)	「大東亜共栄圏」発表	1940年8月	近衛文麿	対英米戦争の準備宣言
(5)	日独伊三国同盟	1940年9月	近衛文麿	英米を敵と世界に公言
(6)	日ソ中立宣言	1941年4月	近衛文麿	対英米戦争準備〔背後の安全〕
(7)	「対英米戦争を辞さず」	1941年7月 2日	近衛文麿	御前会議
(8)	「ソ連に侵攻せず」	1941年7月 2日	近衛文麿	御前会議
(9)	南部仏印進駐	1941年7月 28日	近衛文麿	対英米戦の実質的な開戦
(10)	「対英米戦を決意す」	1941年9月 6日	近衛文麿	御前会議
(11)	パール・ハーバー出撃	1941年11月26日	東条英機	山本五十六 「ハルノート」の25時間前

戦争という国家の軍事行動は表面上いかに「目的不在」に見えようとも、“目的なしの戦争”など古今東西の人類の歴史において決してありえない。

表面上わからないのであれば、それはわからないように戦争の目的が巧妙に

隠蔽されたからである。

〔〔1〕 -1 : 中川八洋『近衛文麿の戦争責任』、PHP 研究所、90～91 頁〕

〔〔1〕 -2 : 中川八洋『近衛文麿の戦争責任』、PHP 研究所、289～292 頁〕

〔〔1〕 -3 : 中川八洋『近衛文麿の戦争責任』、PHP 研究所、91～93 頁〕

〔〔1〕 -4 : 中川八洋『近衛文麿の戦争責任』、PHP 研究所、19～21 頁〕

■ **昭和前期（1925～45 年）とは、内政・外交の主要国策が社会主義・共産主義に呪縛された時代であったという事実を知ることが重要！**

昭和前期とは「**共産（社会）主義思想の全盛期**」であったのだが、戦後になって、**日本共産党**が「治安維持法（1925 年）」をとてつもなく恐ろしい法律であったかのように、**針小棒大に中傷と歪曲**に精を出した効果もあって《**共産（社会）主義思想は弾圧されて逼塞させられた**》との**転倒した嘘の方が定説**となった。

「治安維持法」は**コミンテルンの命令**に従った、**天皇制廃止**などの**革命運動**をする「**団体**」を取り締まったが、**社会主義・共産主義の“思想”**は**全面的に放置**した。

「治安維持法」は**思想規制ではなく、団体規制／運動規制**に絞る**ザル法**であったのが**事実**である。



【治安維持法】

第一條 国体ヲ変革シ 又ハ 私有財産制度ヲ否認スルコトヲ 目的トシテ 結社ヲ組織シ 又ハ 情ヲ知リテ 之ニ加入シタル者ハ 十年以下ノ懲役 又ハ 禁固ニ処ス

2 前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二條 前條第一項ノ目的ヲ以テ其ノ目的タル事項ノ 実行ニ関シ 協議ヲ爲シタル者ハ 七年以下ノ懲役 又ハ 禁固ニ処ス

第三條 第一條第一項ノ目的ヲ以テ 其ノ目的タル事項ノ 実行ヲ煽動シタル者ハ 七年以下ノ懲役 又ハ 禁固ニ処ス

第四條 第一條第一項ノ目的ヲ以テ 騒擾、暴行其ノ他 生命、身体 又ハ 財産ニ 害ヲ加フヘキ犯罪ヲ 煽動シタル者ハ 十年以下ノ懲役 又ハ 禁固ニ処ス

第五條 第一條第一項及前三條ノ罪ヲ 犯サシムルコトヲ 目的トシテ 金品其ノ他ノ 財産上ノ利益ヲ供与シ 又ハ 其ノ申込 若ハ 約束ヲ 爲シタル者ハ 五年以下ノ懲役 又ハ 禁錮ニ処ス 情ヲ知リテ 供与ヲ受ケ 又ハ 其ノ 要求 若ハ 約束ヲ爲シタル者 亦同シ

第六條 前五條ノ罪ヲ犯シタル者 自首シタルトキハ 其ノ刑ヲ 減輕 又ハ 免除ス

第七條 本法ハ 何人ヲ問ハス 本法施行区域外ニ於テ 罪ヲ犯シタル者ニ 亦之ヲ適用ス

附則

大正十二年勅令 第四百三号ハ 之ヲ廃止ス

◇◇◇◇◇

このように、治安維持法とは、第一条で定める、「結社」の「活動」の規

制法であり、規制される「活動」とは、「**国体の変更**（明治憲法第1条～第4条における天皇制度の変更）」と「**私有財産制の廃止**」の**二点のみ**であった。

治安維持法の主旨は、**明治憲法**に基づく国民の自由と権利を擁護するに欠くことはできない**普遍的な真理**を定めたにすぎないから、治安維持法を否定非難する理屈は“**大量殺人鬼**”**レーニン、スターリン**と同種の、**反人間のドグマ**に立つ**狂った人格**でないと、**思いつかない**。

米国では、今日でも日本の治安維持法より厳しい「**Communist Control Act of 1954**（共産主義者取締法）」が存在し、十全に執行されている。

- 帝国大学生が、猫も杓子も、**マルクス、エンゲルス、レーニン、ブハーリン、スターリン**・・・を読んだ、戦前日本の社会状況を知れ！

【マルクス】

出版年	著者	著作名	出版社名
1919年	マルクス／エンゲルス	『資本論』	緑葉社
1919年	マルクス／エンゲルス	『資本論』	経済社出版部
1923年	マルクス	『経済学批判』	大鏡閣
1923年	マルクス	『賃労働と資本』	弘文堂
1924年	マルクス	『ゴータ綱領批判』	内外出版
1920～24年	マルクス／エンゲルス	『資本論』、第一～九冊	大鏡閣
1925年	マルクス	『フォイエルバッハ論』	同人社
1925年	マルクス	『猶太（ユダヤ）人問題を論ず』	同人社
1925～26年	マルクス／エンゲルス	『資本論』、上／下	新潮社
1926年	マルクス	『哲学の貧困』	弘文堂
1926年	マルクス	『経済学批判』	叢文閣

1927年	マルクス	『賃労働と資本』	岩波書店
1927年	マルクス	『哲学の貧困』	新潮社
1927年	マルクス	『ロシア農村共同体の研究』	同人社
1927～30年	マルクス／エンゲルス	『資本論』	岩波書店
1927～28年	マルクス／エンゲルス	『資本論』	改造社
1928年	マルクス	『ケルン共産党事件の闡明』	希望閣
1929年	マルクス	『フォイエルバッハ論』	岩波書店
1930年	マルクス	『哲学の貧困』	岩波書店
1930年	マルクス	『ドイツイデオロギー』	永田書店 岩波書店 希望閣 我等社
1932年	マルクス	『ブリューメール十八日』	共生閣
1935年	マルクス	『賃金・価格および利潤』	岩波書店
1935～36年	マルクス	『ドイツイデオロギー』	ナウカ社
1936年	山田勝次郎	『マルクス 資本論』	岩波書店
1937年	マルクス	『ドイツイデオロギー』	白揚社

【エンゲルス】

出版年	著者	著作名	出版社名
1927年	エンゲルス	『家族・私有財産・国家の起源』	白揚社
1927年	エンゲルス	『仏蘭西および獨逸に於ける農民問題』	同人社
1927年	エンゲルス	『ドイツ農民戦争』	同人社
1927年	エンゲルス	『反デューリング論中の〈道徳と法律〉』	同人社
1928年	エンゲルス	『マルクス主義経済学大綱』	共生閣
1928年	エンゲルス	『住宅問題』	同人社

【レーニン】

出版年	著者	著作名	出版社名
1927年	レーニン	『貧農に與ふ』	マルクス書房
1927年	レーニン	『三月革命より十一月革命まで』	マルクス書房
1927年	レーニン	『組織問題』	マルクス書房
1927年	レーニン	『一九〇五年以後』	政治批判社
1927年	レーニン	『マルクス主義の源泉と構成』	南宋書院
1927年	レーニン	『社会民主主義と選挙協定』	南宋書院

1927年	レーニン	『哲学的唯物主義』	南宋書院
1927年	レーニン	『弁証法の具体的運用』	南宋書院
1927年	レーニン	『一九〇五年の革命についての演説』	南宋書院
1927年	レーニン	『労働者と農民』	共生閣
1927年	レーニン	『遠方からの手紙』	叢文閣
1927～28年	レーニン	『レーニン叢書』第1～24篇(巻) 第1篇『〈人民の友〉とは何ぞや』 第10篇『帝国主義戦争』 第12編『民族問題』 第13篇『帝国主義論』 第22編『協同組合論』	白揚社
1929年	レーニン	『第一革命とその前夜』	白揚社

【ブハーリン、スターリン】

出版年	著者	著作名	出版社名
1926年	ブハーリン	『唯物史観』	白揚社
1927年	ブハーリン	『労農ロシアの社会主義的建設』	弘文堂
1927年	ブハーリン	『解放戦線における農民の地位』	極東社
1927年	ブハーリン	『新反対派について』	南宋書院
1927年	スターリン	『レーニン主義の基礎』	プレブス出版社
1927年	スターリン	『レーニンの基礎』	白揚社
1927年	スターリン	『レーニン主義の諸問題』	希望閣
1928年	スターリン ／ブハーリン	『世界資本主義の安定より危機へ』	マルクス書房
1928～30年	スターリン ブハーリン	『スターリン・ブハーリン著作集』第一～十五巻 この中に スターリン著 『支那革命論』『ロシアにおける階級闘争と革命』『世界資本主義の現段階』『十月革命への道』 ブハーリン著 『ブルジョア経済学批判』 『唯物史観』	白揚社

		などが収録されている。	
1930年	スターリン	『レーニン主義の基礎』	共生閣
1930年	ブハーリン	『唯物史観 史的唯物論の理論その他』	白揚社
1933年	スターリン	『レーニン主義の基礎』	改造社
1933年	スターリン	『レーニン主義の諸問題』	白揚社

このように、**レーニン／スターリン／ブハーリン**の著作に対して、**1925年**の「治安維持法」が施行されたあとも、政府は取り締まりを全くしなかった。

官憲（内務省と司法省のエリート官僚たち）も、天皇制廃止を除けば、「ソ連＝人民の理想の国」だと信仰していたからである。

1927年、与謝野晶子は、学生が猫も杓子も**マルクス**と**レーニン**ばかり読んで、それ以外の思考ができなくなった状況を新聞『横浜貿易新報』で次のように嘆いている。

与謝野晶子曰く、

「**マルキシズム**より**レニズム**へと云ふのが、優秀な大学生間の近頃の研究題目であり……それを**人生の唯一の準拠**として万事を批判し照準する傾向が著しい。この考え方は余りに**冷たくかつ非人間的**である……**人間が物質に負けて隷属した形である**」〔注1〕

「**唯物思想**に偏することも一つの**迷信**である。……目前流行の**階級意識**や**唯物主義**や**過激な破壊思想**を超越して大きく豊かに考へ得る人間であらね

ばならない。・・・欧米の国民が日本の青年ほどにロシアから来た一つの思想に熱狂しないのを羨ましく思っている」〔注1〕

また、1960年の安保騒動で湯川秀樹とともに全国の学生を日本共産党の指揮の下に暴動に扇動した、清水幾太郎は言った。

「昭和初年の1926～27年ですら、神田の本屋街で、平積みの新刊本はみな、マルクスとレーニンばかり。そんな環境で読書好きな優秀な学生が、どうやって共産主義者にならないことが可能ですか」〔注2〕

さらに、『ビルマの豎琴』の竹山道雄もその著『昭和の精神史』で曰く、

「インテリの間には左翼思想が風靡して、昭和の初めは〈赤にあらずんば人にあらず〉という風だった」〔注3〕

小説家の杉森久英も曰く、

「私の学生時代は、昭和初年だが、思想界はマルクス主義一色に塗りつぶされていた」〔注4〕

このように、昭和の御代は、不吉にも、「悪の思想家」マルクスと「悪の革命家」レーニン／スターリンの著作の大洪水で始まった。

“日本の共産化”が国是であると、学界と新聞・雑誌界と軍部と官界が合意していた時代、それが昭和前期であり、これが「歴史の事実」である。

〔注1：『与謝野晶子全集』第19巻、講談社、218～219頁〕

〔注 2 : 中川八洋の清水幾太郎へのインタビュー、1980 年初頭〕

〔注 3 : 竹山道雄『昭和の精神史』、講談社学術文庫、45 頁〕

〔注 4 : 杉森久恵『大政翼賛会前夜』、ちくま文庫、229～230 頁〕

(出典:中川八洋『山本五十六の大罪---亡国の帝国海軍と大東亜戦争の真像』、
弓立社、第 8 章ほかを再構成)

大東亜戦争（日支戦争・対英米戦争の 8 年戦争）の真実 第二回（完）

平成 26 年 1 月 20 日 バークを信奉する保守主義者



(第三回「(仮) 戦争の隠された目的の検証」へ続く)